



日本視覚学会 1995年冬期研究会参加報告

東 吉 彦

東京工芸大学工学部画像工学科 〒243-02 厚木市飯山 1583

1995年1月25日(水)から27日(金)までの3日間にわたり、日本視覚学会1995年冬期研究会(日本視覚学会、日本光学会視覚研究グループ共催)が工学院大学で開催された。参加者は172名で昨年より10名の増加である。参加者の大半は大学などの公的機関の研究者で、残り約15%が企業などの研究者や技術者である。専門分野も生理学、心理物理学などの基礎研究分野から照明、印刷、化粧品などの応用分野まで多岐にわたり、この研究会の特色となっている。

プログラムは13のセッションからなり、特別講演3件、チュートリアル講演6件(予定では7件であったが講演者急病のため中止となり、急遽、生命研斎田氏提供の視覚研究デモビデオが上映された)、一般講演29件、ポスター講演12件であった。この中でチュートリアル講演は今回からの試みで、最近の視覚研究の細分化、専門化に伴い他分野の発表内容がわかりにくくなっているという実情を配慮して設けられたもので、研究動向だけでなく他分野の研究者の理解にも役立つような基礎的内容も盛り込まれている。

講演内容については紙面の関係もあり、後ほど個人的感想を少々述べさせていただくとして、分野別の発表件数を表1に示す。詳細については日本視覚学会の機関誌 Vision Vol. 7, No. 1 (問合せ先: 〒227 横浜市緑区長津田町 4259, 東京工業大学情報工学研究施設 内川研究室、日本視覚学会事務局 Tel. 045-924-5453) に掲載の抄録をご覧ください。

さて一般講演では、最近の3次元表示技術への関心を反映してか、奥行き知覚や立体視関連の発表が目立った。パソコンやディスプレイ装置が使いやすくなったこともあって、この分野に限らず視覚研究全般にこうした装置が利用されるようになってきている。刺激の呈示条件を簡単に変えられるのでパターンや呈示時間を複雑に変えた実験が可能となり、そのさまざまな結果が発表された。また、全体的にみると視覚のメカニズムを調べるようなサイエンスよりの発表が多く、工学者としての立場からはもう少し応用場面を想定した内容の発表が増えて欲しいとの感想をもった。

表 1

セッション	概 要	講演の種類および件数
1	運動知覚, 奥行き知覚	チュートリアル講演1, 一般講演4
2	注意, 視覚探索	特別講演1, チュートリアル講演1, 一般講演1
3	立体視, 視野闘争	チュートリアル講演1, 一般講演3
4	画像認識, 画像理解	一般講演3
5	色の見え, 色恒常性	一般講演3
6	色順応, 色の記憶	一般講演3
7	仮想現実感	特別講演1
8	大脳の視覚情報処理機構	特別講演1
9	ポスターセッション	ポスター講演12
10	色弁別, 視覚的充填	チュートリアル講演1, 一般講演4
11	視野安定	チュートリアル講演1, 一般講演3
12	眼球運動	チュートリアル講演1, 一般講演2
13	眼球運動, 調節	一般講演3

特別講演では佐藤氏(東工大精研)が仮想世界において物体から受ける力(重力や反作用の力)を人工現実感として実現する方法を紹介し、参加者の関心を集めた。

また、中野氏(広島市大)による心理物理測定法の解説を始め、各チュートリアル講演は基礎的な内容がよく整理されていてわかりやすく、初学者にとっては大いに参考になったと思われる。このようなチュートリアル講演は参加者の理解を深め、討論の活発化を図る上でも大いに役立つと思われ、今後とも継続してもらいたい。

他にも多くの興味深い発表があったがここに紹介できなかったことをお詫びする。今後、コンピュータ技術やネットワーク技術の利用拡大とともに映像による情報伝達が盛んになり、映像表示技術の重要性もさらに増してこよう。視覚研究会の活動がこれら映像表示技術を始めたとする画像関連技術の進歩にますます貢献してゆくことを期待したい。最後にこの会の企画、運営に携わった実行委員および関係者の方々に感謝の意を表します。

(1995年4月20日受理)